

救助の手を差し伸べる者と、救助を待つ者とのあいだの、この越えがたい落差。気象学の比喩を用いれば、そこには異なる気候どうしが衝突する前線が姿を見せる。ポテンシャルの異なるふたつの界が衝突すれば、そこでは膨大な放電現象が発生する。この前線を越境する体験とは、予測困難な落雷や暴風雨のさなかを縫って飛行する、渡りmigrationとなる。こうした前線avant-gardeの体験へと感染contaminationされる危機の中へ、既存の学問を追い込む必要があるのではないか。「ディアスポラの知識人」といった言葉が流行だが、diasporaとは、本来どこからも保護されない苛酷な極限状態を意味したはずだ。既存の道徳体系が相互に衝突して軋み、悲鳴を上げる前線にこそ、異文化交渉の倫理の「場ならぬ場」u-topiaを設定したい。そこでは個人individualという共同幻想に立脚したidentity意識そのものが危機に瀕するだろう。だがそれは「引き裂かれた自己」divided selfという否定的な規定を逆転して、分割可能な自己dividable selfを肯定的に構築する作業ともなるはずだ。獣界と鳥界とに引き裂かれた蝙蝠のような二重スパイの境涯を、むしろ個の複数化として積極的に生きること。それはまた、西側でもアジアでもない日本の雑種性に独自性や固有性を見いだそうとする倒立した居直りや、雑種hybrideこそ純血種genuineに勝るとする倒錯した優生思想の危険（北原恵）から自由であろうとすれば、否応無く心身に課せられる電荷だろう。

だがそうした越境体験を特権化する誘惑そのものからも自由であるためには、越境そのものからも越境する必要が生まれてくる。炎の真実を知ろうとして炎に飛び込む蛾の比喩を思い出そう。真実を体験した蛾は炎のなかに消え、その真実をもはや炎の外に伝えることも適わない。伝達できることは真実の屍ではないが、そこに生の証しもある。越境の臨界に立って、回帰不可能な世界への入り口という傷口に手を触れるのは、誰の責務なのか。

連載⑤ 文化の越境

至福千年を目前にして、倫理の零度たる不可触の傷口に指を触れること

先般、チュニジアの作家、アブデルワハブ・メッテブが来日した。立命館大学での講演の際、話題は「不信者トマス」に及んだ。復活したキリストに、自分を信じられぬなら、脇腹の傷に指で触れて確かめてみよ、と誘われた男だ。果たして我々はその「傷」に触れるべきなのか。当方のこの問いへの徐京植さんの回答には、微塵の曖昧さもなかった。勇気をもって傷に触れよ。それは、不可侵をあえて犯す越境への、断固たる意志の表明だった。

こんな質問をしたのは、これに先立って国際日本文化研究センターで「文化の越境」という国際シンポジウムを主催したからだ。副題を「跨文化理解の倫理に向けて」とし、他者理解を介入interventionという観点から捕らえ直す提案をした。ポール・リケールの論文「犠牲者の苦しみと救済という暴力との間」が着想源。外科手術が医学的手段による他者の肉体への介入なら、国境という皮膚を越えた侵犯は外交的介入となる。学問的観察は介入を慎んで距離を保つことを重視するが、それは他者理解という課題を矮小化することにもなる。それどころか、犠牲者を目前にして傍観者で居ることそのものが、消極的な「犯罪」ともなる。

だが現場への介入には恣意性が付きまとう。定義からして、全員を救出できる状況が確保されたなら、その場はもはや緊急援助の対象から除外される。救出者と犠牲者とは無慈悲にも分断される。だが、その境界線を引く恣意性の暴力という代価なくして、難民救済はない。そして救済がいかにか部分的・恣意的であるとしても、それは救済を放棄する理由とはならない。救済されたひとつの生命は、その背後に、救われなかった幾多の魂たちを背負って生還する。また救済者は、犠牲者の痛みから隔てられた自分の限界を痛感する。だが自らが犠牲者と運命を共にしても、そんな英雄気取りなど、はた迷惑なだけだ。他人の苦しみを自分のものとしてできない心の痛み。共感とは、その無力を証言として共有することだろう。

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美